

# 宗教の諸相に関連して

——ニューヨーク・タイムズの二つの記事を読んで——

福田孝雄

## (一) はじめに

二十世紀は、科学の長足の進歩と全地球的規模の史上稀にみる政治、社会、文化諸方面の激動の時代と位置づけられる。

かつて、一世紀以上も前、現代の黎明期の嚆矢に、ニーチエが、その思想的使命としてのキリスト教との対決により、従来の価値規準としての神の「死」を宣告した。しかし古代や中世期のような、人間の全面的生活上における支配や指導性を喪失したと言っても、宗教は依然として大きな社会的、文化的機能を持ち、科学文明が進展し続ける現代社会で、人びとは敬虔な己れの信仰の畏敬すべき対象を見失ないつつあるが、他方ではそのパラドキシカルな面で、宗教のヴァイタリティーと精神的指導性の欠落から人びとは宗教的飢餓感を増大させつつある。その証左として、さまざまな新々宗教や

市井の疑似宗教的な現象の発生があげられる。

また、あれほど厳しく宗教を規制したかつての社会主義国において、その体制崩壊後、既成宗教の勢力挽回が図られていることなどは、その具体的例証でもある。また占いとオカルトなどの流行も、代用信仰と規定すれば、現代日本の社会的経済的困難な「不確定性」の時代に生存する人間の心の空虚さを表象していると言える。

先般、ニューヨーク・タイムズに二十世紀を総括して「宗教と科学」の関連性について論じた記事 *True Believers. Science and Religion Cross Their line in the Sand.* (by George Johnson) (一九九八年七月十二日付日曜版、Vol. CXL VI—No. 51, 216) と、ローマのヴァティカンが、社会的な必要性から「ローマ典礼儀式書」を改訂しエクソシストを公認し、エクソシズムを正規のルートで実行することに関連する記事 *Shoring up Satan, Closing Limbo.* (by John

Tagliabue) (一九九九年一月三十一日付日曜版、Vol. CXL VI—No. 51. 419) が掲載されたが、それを訳出、紹介することから始めよう。

(二) 真実の信仰者たち

科学と宗教は不毛さの状況の中で交差する

ジョージ・ジョンソン

この世紀が始まった頃、楽道家たちは、紀元二千年が始まるまでには、科学者と宗教家たちに論議すべき何ものも残ってはいないだろうという安易な自信を持っていた。科学者と宗教家の双方は、それぞれ知的領域をいかに分けるかに合意して以来、長い時間が経過した。終りなき議論が終って、なぜ宇宙は存在するようになったかとか、人びとはいかにその世界で営為をなすべきかなどの問題は、宗教に委ねて、科学は物質的世界がいかに機能しているかについての、重要な説明に向って避けることのできない行進を継続していた。また、希望した人びとは、より高次の霊的力を信じるのが可能であった。そしてその人たちの存在は、実験の吟味を超えて安泰であった。しかし信じる人も信じない人も、同じく殆ど凡ての人びとは、次第に理由と観察の交錯から紡がれた創造の絵画を奉じざるを得なくなってきた。その場に適し暗黙の理

解に基づき、古き神の真理と人間の真理言うと宗教と科学の争いは色褪せていった。ジョルダノ・ブルーノ<sup>(1)</sup> (Giordano Bruno) は、教会の教義に反抗して火炙りの刑に処せられるとはなく、またガリレオ・ガリレイ<sup>(2)</sup> (Galileo Galilei) が、自宅に監禁されることもない、というようなことは決してなかったのだ。しかし自分の境界内に止まることに満足せず、科学と宗教の間の小論争はまた再燃するのである。二十世紀の知性の参加自由の討論において、その折々の参加者たちを別々に語ることは難しい。

「発達心理学」と言う思いつきとも言える新しい名称をもって装いを変えた社会学は、宗教的信念と道徳的行動を、DNAの競い合う断片の副産物として、取り除く説明を試みることで、忠実な信者たちを踏みこむことを続ける。宇宙学者や物理学者たちが、自らの問題の目的を、ステフェン・ホウキング (Stephen Hawking) が同じく「神の心を知ることである」と定義する時、それはまったく神学者 (theologian) と同じように思えるのである。物理学者のジョージ・スムート (George Smoot) が、数年前宇宙の背後の放射線のおぼろげな髣——それは宇宙の展開を説明するのに長期にわたる調査によって得られたデータが、必要であったが——を発表する際に、彼は「神を見ている」ようだとやった。

この種の話は、しばしば敬虔的と言うよりもっと隠喩

的であるが、しかしアインスタインは、その研究方向をよく引き合いに出される黙想でスタートした時、「微妙であるが悪意のあるものではない」し決して、分け前を骰子サイコロで決めることのない神を、からかうようなことはなかった。そして今や、この種の意見は、宇宙論的な努力の背後の野望の深さを明らかにする。つまり、究極的な神秘への最終の解答をである。その暗示するものは、宗教は身を引いて、その凡てを科学者に委ねるべきだと言うことである。

しかし、このゲームをするには、二つの方法がある。宗教の信者たちは、彼等自身の神学の明らかにされた真理を支持するための、科学的データを解釈することを試みようとして、その境界線を超えることに、かつてよりもっと熱心になったように見える。特殊創造信奉者は、<sup>(3)</sup>放射能のデータに適切な処置を施し、ついには地球はまさに数千年のものであり、宇宙は数日で創造されたと言う議論で、このことについては誠に老練なものである。ダーウィン (Darwin) の「種の起源」(On the origin of Species) の出版以後、百五十年が過ぎたが、生物学者や地質学者は、進化論は「単なる理論」であること——それは地球が太陽の周りを廻ることも仮設だと、同じように言われ得る何かを学校で教えることを望んでいる国の法律制定者たちの前では、彼等はその仕事を、今だに護ろうとしている。

宗教の名におけるこの科学的データの整理は、四年前に「不死の薬」(The physic of immortality) と言う一般書で、ある新しい高さまで到達した。その中で宇宙学者のフランク・J・ティプラー (Frank J. Tipler) は、量子理論、コンピュータ科学、社会学さらに永遠なる来世の存在を数学的に立証しようとして、ゲームの理論を参考にしている。この面白い筋立ては、結果的には、科学者と神学者の双方の卑屈な態度を作ることになった。

科学と宗教の間の関連性を見出そうとする数少ない書物は、この世紀の間中、散発的に現われた。しかし最近のうねりの高まりは、ジェラルド・L・シュローダー (Gerald L. Schroeder) の「神の科学——科学と聖書の知恵の集合」(The Science of God: The Convergence of Scientific and Biblical Wisdom) (The Free Press 1997) およびシェ・レイモ (Chet Raymo) の「懐疑論者と真の信仰者——科学と宗教の間の陽気な関係」(Skeptics and True Believers: The Exhilarating Connection Between Science and Religion) (Walker 1998) のタイトルに見られるように、誠に注目すべきものがある。

科学と宗教の間の境界を腐食させる恐れがあるが、あたかも同じ全教的な集会における二つの異なる宗派であるかのように、双方を和解させることを試みる話さえある。もし、

ルーテル教徒とカトリック教徒が、少しも分裂することがなく、先月あったように信仰についてある部分で合意するならば、科学者と神学者は勿論、分裂することがないだろう。資金の潤沢なジョン・テンプレトン財団（John Templeton Foundation）は、全世界の大学研究機関で、科学と宗教のプログラムを開設する計画に乗り出した。先月、パークレイでの共通の立場を探り出すための「科学と霊性の探求」“Science and the Spiritual Quest”と称する会議に、巨額の資金提供を保障するに到った。これは、大胆な新しい理論が、一人の科学者を教会の法廷に登らせる時代からすれば、大きな変化である。いかに最も信心深いキリスト教徒であっても、科学はこの世界に定着していることを承知している。科学の最も強力な進化やビックバンの諸理論を、完全に拒絶するいかなる宗教も、それ自身を社会の周辺に委ねることを発見するだろう。「対話」（dialogue）のための動機づけの部分は、それをそう呼ぶことを好むように、教会のためには全く戦略的なものである。つまりますます科学的な世界となる中で、宗教はそれ自身のために最適の場所を守ることが、必要だからである。

そしてある神学者たちは、科学がまったく自信過剰の態度のために、その多くの専門家たちが自らの画く世界が、完全性から程遠い所にあるのを認めることをいとわないで、特徴

的でない、傷つきやすい地位に落ちることを、感じているかも知れない。物理学者たちの、神の発見に関する性急な発表に対する対位形式におけるものは、小さくか弱い人間の頭脳が、真に今まで理解することができたのは、無限の宇宙の中のいかに僅かなものであるかに、ひどく苦しむ科学者たちのより静かな合唱<sup>コーラス</sup>なのである。慈善事業を趣旨にかかげるアルフレッド・P・スローアン財団（Alfred P. Sloan Foundation）は、その努力が時にそう呼ばれるように、「不可知性」という科学の限界を探求するための計画に着手した。もし、ある科学者たちが、自分たちは全ての解答を見出すことができないうことを認めるならば、その時こそ話し合うべき時なのである。

この魂の探求のいくつかの背景で、くずぐずしているのが、科学的、宗教的な全信念体系のメッセージを持つポスト・モダンの哲学であり、これはまさに人間の建設なのである。この種の思想は、英国の大学の学部にあるように、あらゆる神学校や高等教育機関に、食い込みつつある。このレンズを通して科学もまさに、もう一つの宗教であり、元素の周期表も使徒信条も、まさに解体すべきもう二つのテキストである。

多くの宗教指導者たちは、道徳的現実性を脅す危険性のあるものとして、ポスト・モダンの相対主義を拒絶し、そしてまた科学者たちは、それをば聖書の特殊創造説やセドナ

(Sedona) やサンタ・フェ (Santa Fe) の新時代の預言者たちが触れ歩く、外見を新たにした中世の妖術 (sorcery) の如く、不愉快なものとなしなしている。実際、強い宗教的信念を持つものであっても、和解の時流に乗る科学は殆どいない。研究室や講堂で、彼等は仮説や実験を通して得られた不確実な真理と信仰から湧き出た不動の信念との間に、厳格な隔離をなお、けんめいに支持しているのである。科学者は、宗教が得た知慧を支えようとする場合、いかなる役割を果すことができるだろうか。そして、実験に耐えないからと言って、どの教会が、教義を捨てるであろうか。科学と宗教をもっと十分に緊密に近づけるとしても、それらは必ず油と水のように反撥し合う。

### 強い希望

科学と宗教とはなぜ、相互にそれぞれの奥地に手出し続けるのだろうか。そしてなぜ、人びとは、ただ境界を超えるだけではなく、それを破壊しようと思ひ、また必要とするのだろうか。

これらの願望は、確かに凡てを抱擁する解釈を構築しようとする人間の衝動から、湧き出るのである。何も無いと言うのではなく、雪の形状はどのようなものかなど、凡てのもの

を考慮するシステムに対する希望を捨てることは、難しい。

もし、人がこの信念に忠実であるならば、その時、科学は最終的に宗教を包み込まなければならぬか、またはその反対であり、少なくともその人自身の心の中に包み込まねばならぬ。成果を分け合う休戦は、最終的な物語りを語るための行動の中に、作用を保持する一時的且つ戦略的なものであろう。

しかし、最終的解答を見出すと言うことになれば、宗教的、科学的な探求者たちは、その両者の接近には弱点がある、と心の底では知ることになる。いかなる宗教の教説も、最終的には預言者或いは神の声を聞いたと言う人びとの古き啓示に由来するものである。これらの真理は、絶対的且つ超時間的なものとして、帰依される筈であるが、しかしそれらは必然的に信仰の躍進——まさにそれは宗教の強さの源であるが——に基づいている。しかしもし預言者たちが間違っていたり、或いは実在しなかった場合はどうなるのだろうか。

科学の弱さは、また強さでもある。科学の知恵は、定義すれば、永遠に確定的ではなく、常に修正を条件とするものである。たとえ理論をいかに強制するように見えても、堅固な大地のようなものをも震わせ、覆してさえも新しく発見する可能性は常にあるのである。信仰の荷はより軽く、そしてそれは確実に理解するための道であるが、その旅は決して終る筈はない。

双方の方法を交換することがあっても、それぞれの側に、時として他を妬むことがあるのは、不思議ではない。それが、確実に何ものをも決して知ることのない現実の、災いのすべてである。

訳者注

- (1) Giordano Bruno (一五四八—一六〇〇) イタリアの文芸復興 (ルネサンス) 期の自然哲学者で教会の迫害を受け各国を流浪し、ついに火刑に処せられた。コペルニクスの地動説に基づいて宇宙の等質均等を確信し、一切の事物は一つなる神の現われとして汎神論を主張、神は宇宙の生命、原因であって、世界の極微の部分 (モナド) もこの神的生命を呼吸すると考えて、そこに微少な人間の誇りを見い出す。スピノザやライプニッツの先駆とされている。(主著) *Della causa, principio et uno*, 1584; *Del infinito universo e mondi*, 1584. (岩波哲学辞典)

- (2) Galileo Galilei (1564—1642) イタリアのピサ及びパドヴァ大学の教授からフィレンツェのジコモ二世の宮廷付の数学者となった。近代自然科学の父であり、特に落体法則の発見、天体望遠鏡の発明、木星の衛星の発見などにより知られる。コペルニクスの地動説を支持し、教皇庁から、その学説を禁止 (一六一六) され、さらに宗教裁判にかけられた (一六三二) ことでも有名。彼は、中世を支配したスコラ的なアリストテレス盲従をしりぞけて、感覚、観察、実験に基づく新しい科学的方法をうちたてた。その際 F・ベーコンとは違って、数学の不可欠な意義を確認した。(主著) *Il saggiatore*, 1623 (試金者) ; *Dialogo sopra i due massimi sistemi del mondo*, 1632 (二つの世界体系についての対話) ; *Discorsi e dimostrazioni matematiche intorno a due nuove scienze*, 1638 (新科学対話、今野・日田訳) (岩波哲学辞典)

- (3) 特殊創造説 (creationism) 種の起源及び物質の発生は進化 (evolution) によるのではなく、造物主の特殊創造によるという説

(三) サタンを支え、リンボ (天国) に近づく

ジョン・タグリアピュ

(現代は) 伝統主義者 (traditionalist) たちの、時期のように思える。最初、昨年 (一九九八) の十一月に、キリスト教の第三回の千年祭 (millennium) の式典の際に、信徒たちは、後の世の罰のさまざまな形態から恩赦を得るための、寛大なより広い配列と道とが提供されるだろうと言う、ヴァテイクンの布告が行われた。

その後クリスマス直前に、著名なイタリアの神秘主義者で伝統的カトリック信徒の中で敬愛されている神霊治療者のピオ司祭 (Padre Pio) が、この五月に列聖される前の最後の階程として、列福されることが公表された。因みに、教皇ヨハネ・パウロ二世は、歴史上他の教皇達よりも多くの二七〇名に及ぶ聖人を新たに公認し、そしてこれも最も多い八〇〇名の人びとを列福した。

そして先週ヴァテイクンは、悪魔 (Devil) は本当に実在し、そして世の中で大いに活動していることに疑いを持つ人

びとに対し、その実在を認め悪魔 (Demon) を追い出すための、昔の儀式である悪魔祓い (exorcism) のカトリック典礼を改訂して出版した。

更に続いて、本年の末頃には、ヴァティカンには、一万人のまたは公認される聖人と殉教者たちを網羅したリストの、最新の殉教録 (martyrology) を出版する予定である。

これらの凡ての実施は、カトリック教会内の、さらにはプロテスタントとカトリック間の論議の主題でもある。一九六五年に結論が下った第二回ヴァティカン公会議以来、それら一連のいくつかの儀式を重要視する方向の変更が検討されていた。リベラルなカトリック教徒たちは、救済の実践へのより古き律法主義的な反映のような、宗教的慣習には、不安を感じている。プロテスタントの改革派は聖人の宗教的治療法を軽蔑したし、また多くのカトリック教徒たちは、天国への近道を提供するように思える寛大な認識に、不快感を抱いている。しかしながら、殆どの人たちは、悪魔を追い出す話を、深い精神的な価値よりも、映画の「ローズマリの赤ちゃん」 (Rosemary's Baby) や「エクソシスト」 (The Exorcist) の多くのイメージから、呼び興しているのである。七十八歳のヨハネ・パウロ二世が、教皇として三十年目に入り、ヴァティカンは異なる目標を追求するように思える。教会を現代的なものにしようとする第二回ヴァティカン公会議の指令は、

深刻に受け取られた。しかし同時に、ヨハネ・パウロ教皇は、無差別な変化を拒否する。現教皇は、例えば女性の聖職授任についての議論さえも禁止すると同じくらい、固く聖職者の独身主義についての観念に固執している。またヴァティカンは、教皇の保護の下に、現代の精神と共存できる昔の慣習を明示するために、より変化の少ないものを制定しようとする。権威筋によると、ヴァティカンは、広範囲の異なる社会における幅広いさまざまな信徒の感情を考慮に入れようと苦しんでいると言う。

最近の数十年において、カトリック教徒たちは、大小の急激な変化に直面した。「一体何かリンボ (Limbo) に起ったか」と、古きカトリック教徒たちは尋ねるかも知れない。かつて教会は「リンボ」とは、まだ洗礼を受けない幼児達が死後赴く場所だと教えていた。新しい思考が進んだのだが、今なおその考えは周囲に存在している。しかしまったく、空虚なものだ。キリストが昇天する以前に死んで天国に行ったアブラハム (Abraham) やモーゼ (Moses) が、まさに自然の至福を享受している状態にあると、今なお信じられている。昇天の思想は、同じように、彼等を天国に導いたのであり、また幼児たちも、そこに達したのである。

修道士の肩衣のような、多くの親しまれた献身を象徴するものは、かつて学校の多くの児童たちの首の囲りに捲かれた

ものであった。ウールの切れ端は、聖像が画かれているプラスチックの容器に納められており、スカプラーは免罪符の如く、多くの霊的な恩寵を与えると信じられていた。ある種の人びとは、もし人間がそれを身につけて死ねば、救済が保障されると思っていた。

しかし、エクソシズム(悪魔祓い)は、衰退するどころか、カトリックの教義の一部では、復興の徴しさえ見られるのだ。昔は広く伝播し浸透した信念であったエクソシズムの実践と悪魔の信仰は、多くのカトリック教徒にとっては、霊的な理由よりも、より空想科学的フィクションである。カトリックの大多数の神学者達は、エクソシズムを「完全な愚行」であると観ていると、フォルダム大学(Fordham University)の社会学者のマイケル・W・クネオ(Michael W. Cuneo)は述べている。ヴァティカン当局自身は、エクソシズムの儀典書を改訂することで、今なお悪魔(Devil)の信仰を固く持ち続け、そして通俗な大衆小説や「エクソシスト」(The Exorcist)の映画のような形態のものが、一般に広まっている観念から、キリスト教徒を引き離すことによって、その苦痛から解放したのである。

「私自身は、デヴィルの宣伝マンではない」「しかしより高い精霊の信仰は、プレ・ユダヤ教的、プレ・キリスト教的なものである」と、ローマのグレゴリアン(Gregorian)大学

の司祭でジェスイト(Jesuit)の神学者ジョン・ナヴォネ(John Navone)師は、語っている。

ヴァチカンの悪魔やエクソシズムの再確認の仕事は、部分的には、精霊信仰が広く行きわたっている先進諸国の教会のために計画されたのかも知れない。「クリストの勝利は、人びとを守護するために、これら諸の精霊を凌駕している。だから貴方たちは恐怖の中に生きるべきではない」「その場合、クリストがサタンに勝利すると宣言することは、恐怖よりもむしろ希望の著なのである」と、ニューヨークの雑誌の編集に携わるトーマス・リーズ(Thomas Reese)師は語っている。

アメリカ合衆国のような高度先進文化を誇る国々においてさえ、エクソシズムにとっての繁盛する市場が存在するのである。「人びとは災いはアルコール中毒のデーモンや夫婦の不倫のデーモンや不況のデーモンにもたらされたものだと思っている。」「そしてエクソシズムは速効的な救済を用意する」とクネオ教授は言っている。

六年前には、アメリカのカトリック教会には一人しか公式のエクソシストは存在しなかったが、今や十人もいる。公式のエクソシストに加えて、沢山のこのような儀式が、しばしば伝統主義者の好みにより、聖職者たちにより不法に実践されていると、トーマス氏は言っている。そして背教的エクソ



シストたちは、どの点から見ても、精霊信仰を攻撃すると同時に、ヴァティカンを困惑させつつある。

先週、ヴァティカンは再度、心理的病いと憑霊とを混同しないよう、そして、同時に精神的解決の方法を提供しながら、医療的援助を捜し求めるべきことを、司祭や聖職者に対し警告を発している。

(訳者注)

(1) ピオ司祭 (Padre Pio) という人は、カプチン修道会の神父で一九六八年に他界するが、生前、多数の病の癒しを施し、礼拝者が後を絶たなかったと言われる。この司祭を有名にした神秘的な現象は、キリストと同じ場所に傷ができる聖痕現象だったと伝えられる。キリストと同化したいという強い願望による自己暗示によって発生するという説もあるが、ヴァティカンの公式な見解は出ていないという。次のようなエピソードが伝えられる。戦後間もない頃に、青年司祭のカルロ・ヴォイテイワというポーランド人が告解にやって来た時、ピオ神父は、その青年司祭は、将来教皇になると預言する。この司祭は、やがてクラクフの大司祭となり四十年後に、ポーランド人法王ヨハネ・パウロ二世となった。現在南イタリアのブーリア州のガルガンノ半島のサン・ジョヴァンニ・ロトンドと言う村に、ピオ神父の聖地が建設され、大聖堂や大病院が出現、年毎に各国からの巡礼者の数が増加し、フランス聖母出現の聖地ルルドを上回ったと発表されたという。

(四) 若干のまとめ

宗教と科学の関係は、極めて難しい問題を含んでいる。先に訳出した宗教と科学の関係についての論説は、かつてキリスト教がヨーロッパ社会において、圧倒的力をもって君臨し科学及び諸学を隷属せしめていた時代から、ルネサンスを通じて人間の理性や合理性の尊重から近代の学問が発生、発展し、現代の宇宙物理学の分野の諸学者が、宇宙の神秘的現象の中に合理的判断を超えて、神を感じ、見たという体験を通じて、宗教と科学の将来の共存と協力関係の可能性が語られた。

元来、宗教と科学の双方の基本的関心は、まったく次元の異なるものである。宗教は人生の意味や生活上の規範となるものを思索し構築する。その結果、その中で人間の生きる世界と構造について説き、人間の生活の中で遭遇する諸の事物事象を意味づけ、評価する。科学は一定の方法論のもとに構成される合理的、自律的理論体系で、ついにはあらゆる事物事象を統一的に規定し、説明することになる。

最初に訳出した論説は、つまり両者の領域の交差する、両者の変遷の過程と展望についてのものである。

宗教が科学に対して支配的な立場にあり、ときにはそれを

弾圧することもあったが、時代の進化に伴ってその位置が逆転し、科学が優位に立つに至ったと指摘されるように、両者の優劣が逆転したことも事実であろう。人類史を通じて、両者の対立抗争、和解や統合がさまざまな形で繰り返されてきたが、特にヨーロッパにおけるルネサンス以降の近代科学の誕生が、現代の思想的状況にも深くかかわり影響を及ぼすに至った。地動説をめぐる教会とのいきさつ、ダーウィンの進化論の及ぼした影響などが挙げられる。

しかし宗教と科学は共に、きまった内容をもっている訳ではなく、それぞれが多面的で多様な傾向と形態を有しており、その時代の変化に応じて絶えず発展と変貌をうけて行く。時代の流れは宗教の教理を合理化して行く方向にあると言っても、唯一神教の場合、世界創造と人間の発生について説かれることを、科学的方法による説明に変換し、さまざまな奇跡、超自然的領域に属する出来事と伝えられるものは否定され、比喩的説話の範疇に入れてしまうことが可能かどうかである。

仏教の場合、基本教理は縁起、無我の立場であるから、一般的傾向として科学の発展となら矛盾することなく、科学と共存しようと合理的に説明をすることが可能であると言う。しかし仏教の宗教性の非合理的なものを全く無視し、倫理道德についての教えや、人道的な立場から万人の納得できる面

のみを強調した場合、仏教が本来持っている信仰や宗教的行動の本質はどうなると言うのであろうか。結局宗教と科学の次元の違いを認めることを大前提とし、人間実存の全体的な構造の中で基本的に共通するものがあるか、今後宗教と科学が共同して求めていく努力をなすべきことを示唆している。

次の「悪魔祓い」に関する解説の記事である。当然これはカトリック教会内部の、伝統的エクソシズムの問題と現状の教会側の対応についての関連記事である。カトリック教会内部にも、エクソシズムに批判的立場や見解があると言う。しかし伝統的に悪魔祓いの儀式が、全面的に否定されることが不可能な社会的個人的現象であり、教会内部でもそれを公式に認めつつ、他の精神医学や心理学などと連携を保ちつつ、精神治療の立場から対応して行くとうとする傾向にあると言う。勿論、ヨーロッパの地域でも特に、エクソシズムに対する信仰の厚い国や地域がある。それらの背景となるさまざまな諸条件の中にも、一つの大きな流れとして、モダニズムの価値観の崩壊が位置していると見られる。

仏教の場合「悪魔」について、具体的記述があるのはパリ教典であろう。悪魔についての定義は、例えばスツタ・ニ<sup>1)</sup> パータ<sup>1)</sup>では、人間の内心の煩惱の表象であって、愛欲、嫌悪、飢渴、渴愛、昏沈、睡眠、恐怖、疑惑、偽善、強情などが挙げられている。

また同じく古層に属するサムユッタの中の魔に関する諸経には、釈尊の悟りの後、そして原始教団が成立した後にも悪魔との対話の説話が語り継がれている。それら多くの説話も、内心の表象の比喻として見るべきか。スッタニパータの偈の中に、修行中のブツダにつきまといっていた悪魔は、つけ入る隙をみつげることがなく、憂いうちしおれて、ついに意気銷沈し消え失せたと記述される。<sup>(2)</sup>ましてや悟後は一切の煩惱が消滅し覚者となったのだから、内心の煩惱の表象としての魔の記述は存在しない筈である。サムユッタの悪魔は、釈尊の縁起、無我の立場に対して、有の立場、快樂主義的な超自然的存在として登場する。キリスト教の悪魔は、自らの傲慢さによって天から追放された天使（墮天使）であり、聖書においては誘惑者として描かれている。悪魔の誘惑に打ち勝つことにより、人間はより精神的に強くなるのだと言う。

さて、仏教の場合、縁起、無我の立場から合理的説明は成立する。その基本理念によって、すべての事象が合理的に整合性をもって片づけられる。しかし日本仏教の諸形態は、祖先供養を中心に、アニミスティックな信念と習合し、発展したことも事実である。

教理、教学上の矛盾を抱えたまま、それについての積極的論議も反省もなく、なしくづ的に時代の流れのままに、変質変容していく仏教の基本的教理としての縁起、無我の理念

は、主体性を欠き、無責任さをそのままにして流されて行く危険性をも否定できない。

(注)

(1) 436. Kāma te paṭhamā senā, dutyā arati vuccati, tatiyā khuppiṭṭhā te, catutthi taṇhā pavuccati, 437. pañcamī tīnamiddham te, chaṭṭhābhīrū pavuccati, sattamī vicikicchā te, makkho thambho te aṭṭhamo.

(2) 446. Satta vassāni Bhagavantam anubandhim paā padam otāram nāhigacchissam Sambuddhassa satimato.

449. Tassa sokaparetassa vinā kacchā abhassatha, tato so dummano yakkho tath' ev' antaradhāyathā ti.